

入学試験問題



地理歴史

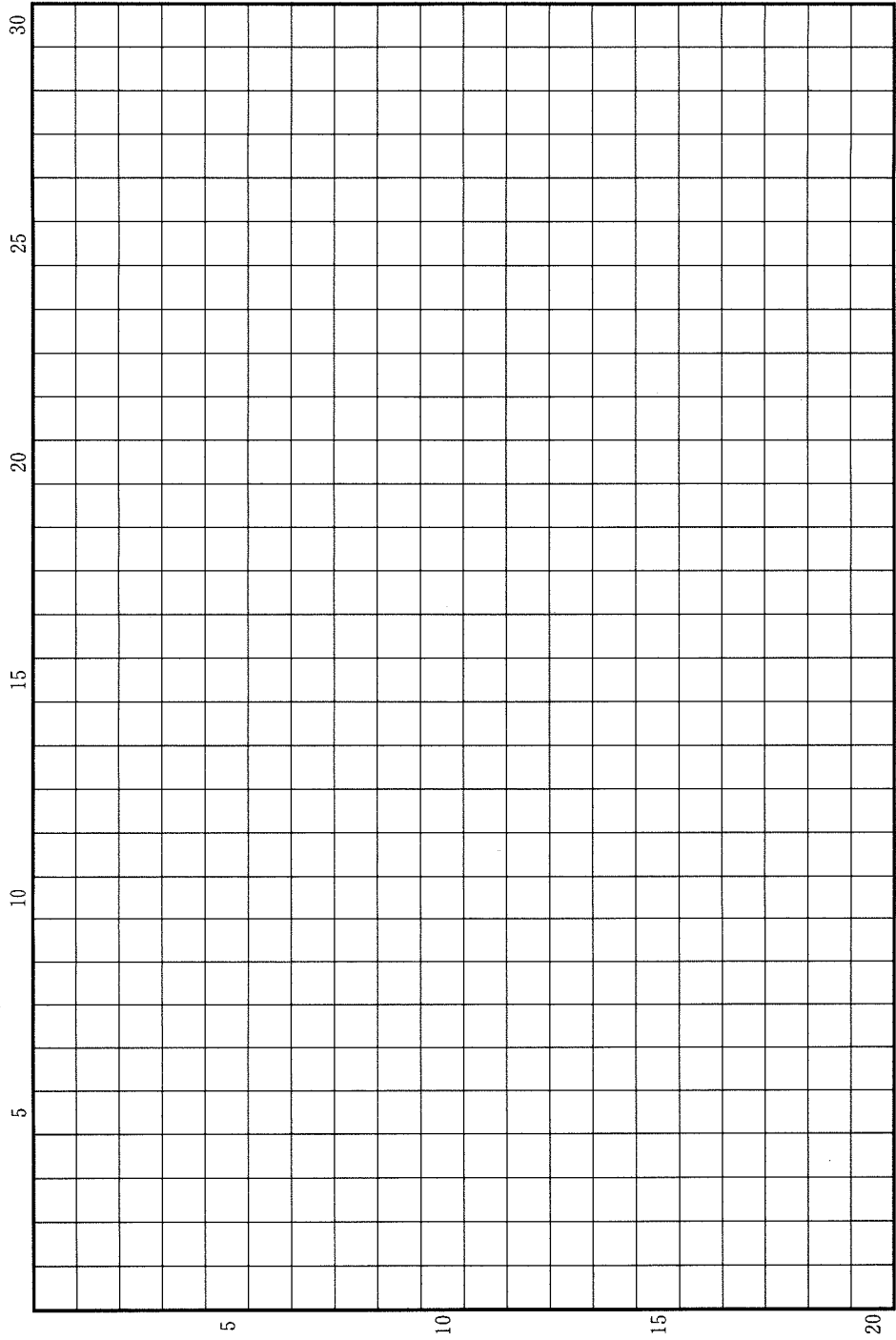
(配点 120 点)

平成 31 年 2 月 26 日 9 時 30 分—12 時

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 この問題冊子は全部で 43 ページあります(本文は日本史 4 問 4～13 ページ、世界史 3 問 14～25 ページ、地理 3 問 26～43 ページ)。
落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 日本史、世界史、地理のうちから、あらかじめ届け出た 2 科目について解答しなさい。
- 4 解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 5 解答は、1 科目につき 1 枚の解答用紙を使用しなさい。
- 6 解答用紙の指定欄に、受験番号(表面 2 箇所、裏面 1 箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 7 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 8 解答用紙表面上方の指定された()内に、その用紙で解答する科目名を記入しなさい。
- 9 解答用紙表面の上部にある切り取り欄のうち、その用紙で解答する科目の分のみ 1 箇所をミシン目に沿って正しく切り取りなさい。
- 10 解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 11 この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 12 解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 13 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)



日 本 史

第 1 問

10 世紀から 11 世紀前半の貴族社会に関する次の(1)~(5)の文章を読んで、下記の設問 A・B に答えなさい。解答は、解答用紙(イ)の欄に、設問ごとに改行し、設問の記号を付して記入しなさい。

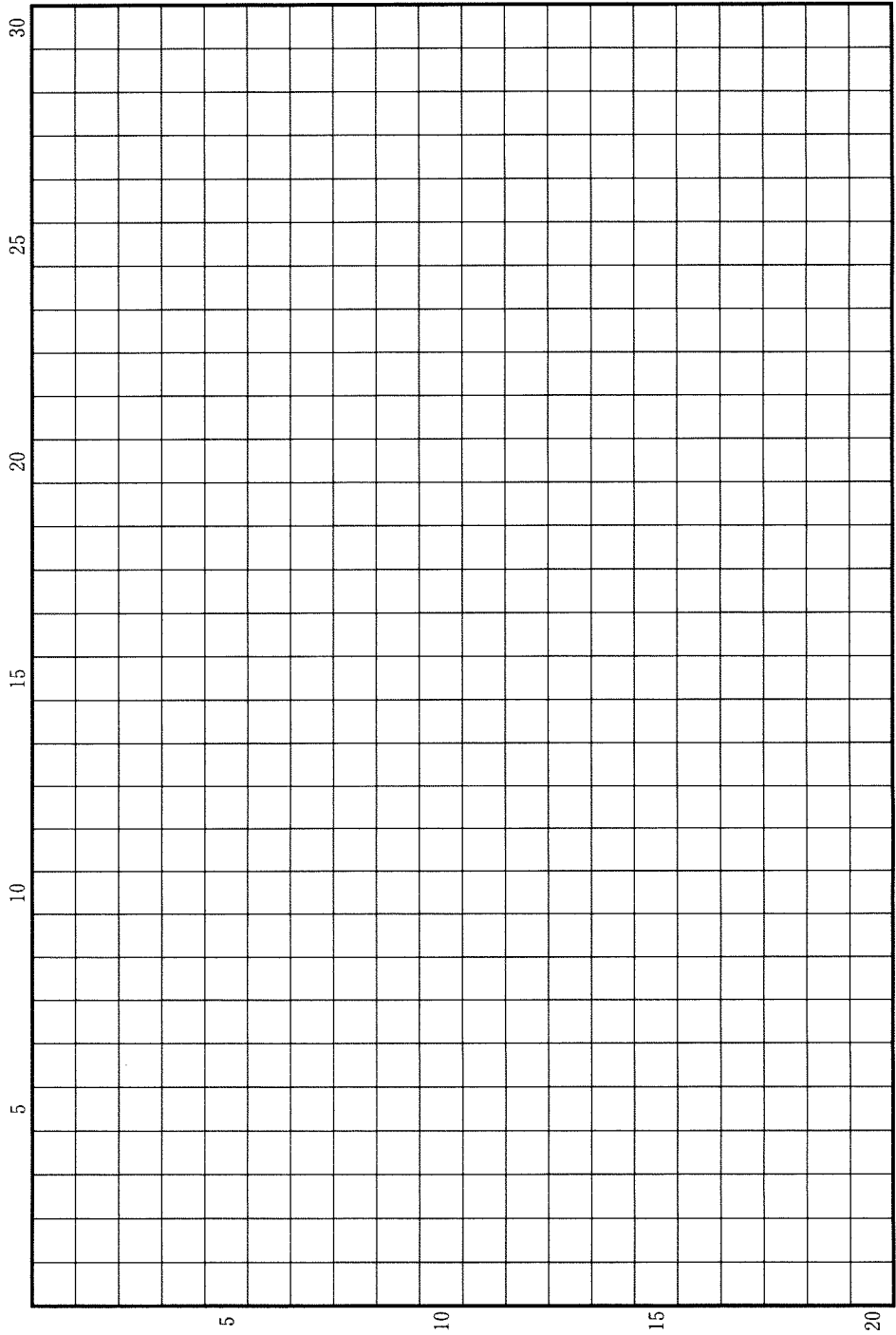
- (1) 9 世紀後半以降、朝廷で行われる神事・仏事や政務が「年中行事」として整えられた。それが繰り返されるにともない、あらゆる政務や儀式について、執り行う手順や作法に関する先例が蓄積されていき、それは細かな動作にまで及んだ。
- (2) そうした朝廷の諸行事は、「上卿」と呼ばれる責任者の主導で執り行われた。「上卿」をつとめることができるのは大臣・大納言などであり、また地位によって担当できる行事が異なっていた。
- (3) 藤原^{あきみつ}顕光は名門に生まれ、左大臣にまで上ったため、重要行事の「上卿」をつとめたが、手順や作法を誤ることが多かった。他の貴族たちはそれを「前例に違^{たが}う」などと評し、顕光を「至愚(たいへん愚か)」と嘲笑した。
- (4) 右大臣藤原^{さねすけ}実資は、祖父左大臣藤原^{さねより}実頼の日記を受け継ぎ、また自らも長年日記を記していたので、様々な儀式や政務の先例に通じていた。実資は、重要行事の「上卿」をしばしば任されるなど朝廷で重んじられ、後世、「賢人右府(右大臣)」と称された。
- (5) 藤原道長の祖父である右大臣藤原^{もろすけ}師輔は、子孫に対して、朝起きたら前日のことを日記につけること、重要な朝廷の行事と天皇や父親に関することは、後々の参考のため、特に記録しておくことを遺訓した。

設 問

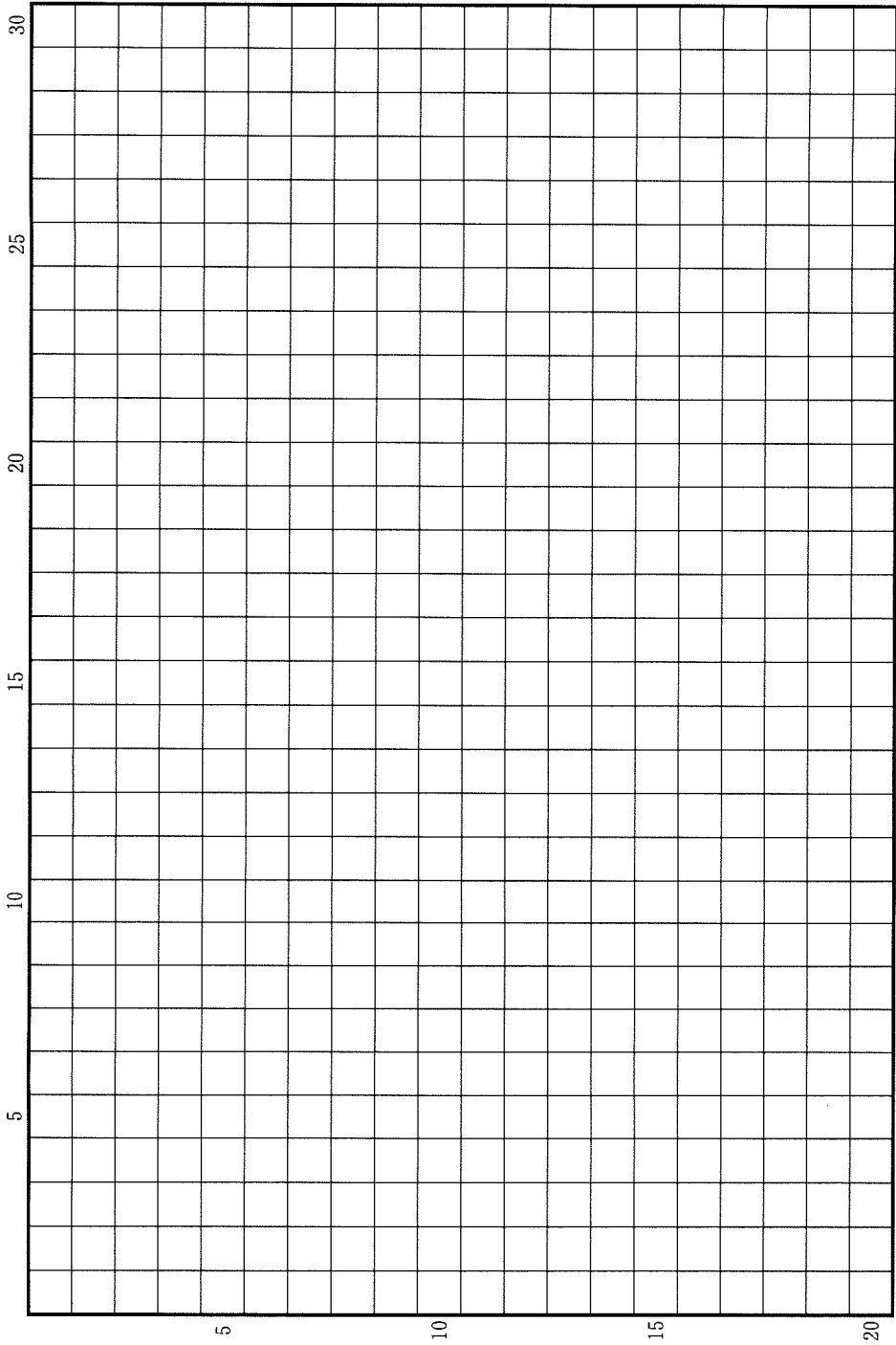
A この時代の上級貴族にはどのような能力が求められたか。1行以内で述べなさい。

B この時期には、『御堂関白記』(藤原道長)や『小右記』(藤原実資)のような貴族の日記が多く書かれるようになった。日記が書かれた目的を4行以内で述べなさい。

草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)



草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)



第 2 問

次の(1)~(3)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。解答は、解答用紙(口)の欄に、設問ごとに改行し、設問の記号を付して記入しなさい。

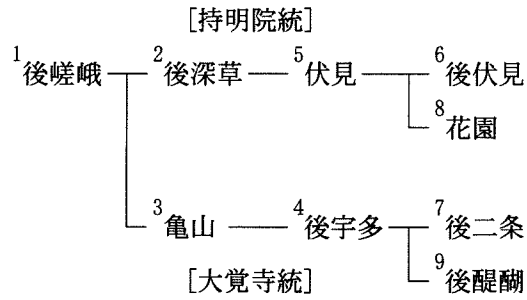
- (1) 1235年、隠岐に流されていた後鳥羽上皇の帰京を望む声が朝廷で高まったことをうけ、当時の朝廷を主導していた九条道家は鎌倉幕府に後鳥羽上皇の帰京を提案したが、幕府は拒否した。
- (2) 後嵯峨上皇は、後深草上皇と亀山天皇のどちらが次に院政を行うか決めなかった。そのため、後嵯峨上皇の没後、天皇家は持明院統と大覚寺統に分かれた。
- (3) 持明院統と大覚寺統からはしばしば鎌倉に使者が派遣され、その様子は「競馬のごとし」と言われた。

設 問

A 後鳥羽上皇が隠岐に流される原因となった事件について、その事件がその後の朝廷と幕府の関係に与えた影響にもふれつつ、2行以内で説明しなさい。

B 持明院統と大覚寺統の双方から鎌倉に使者が派遣されたのはなぜか。次の系図を参考に、朝廷の側の事情、およびAの事件以後の朝廷と幕府の関係に留意して、3行以内で述べなさい。

系図



* 数字は天皇に即位した順

第 3 問

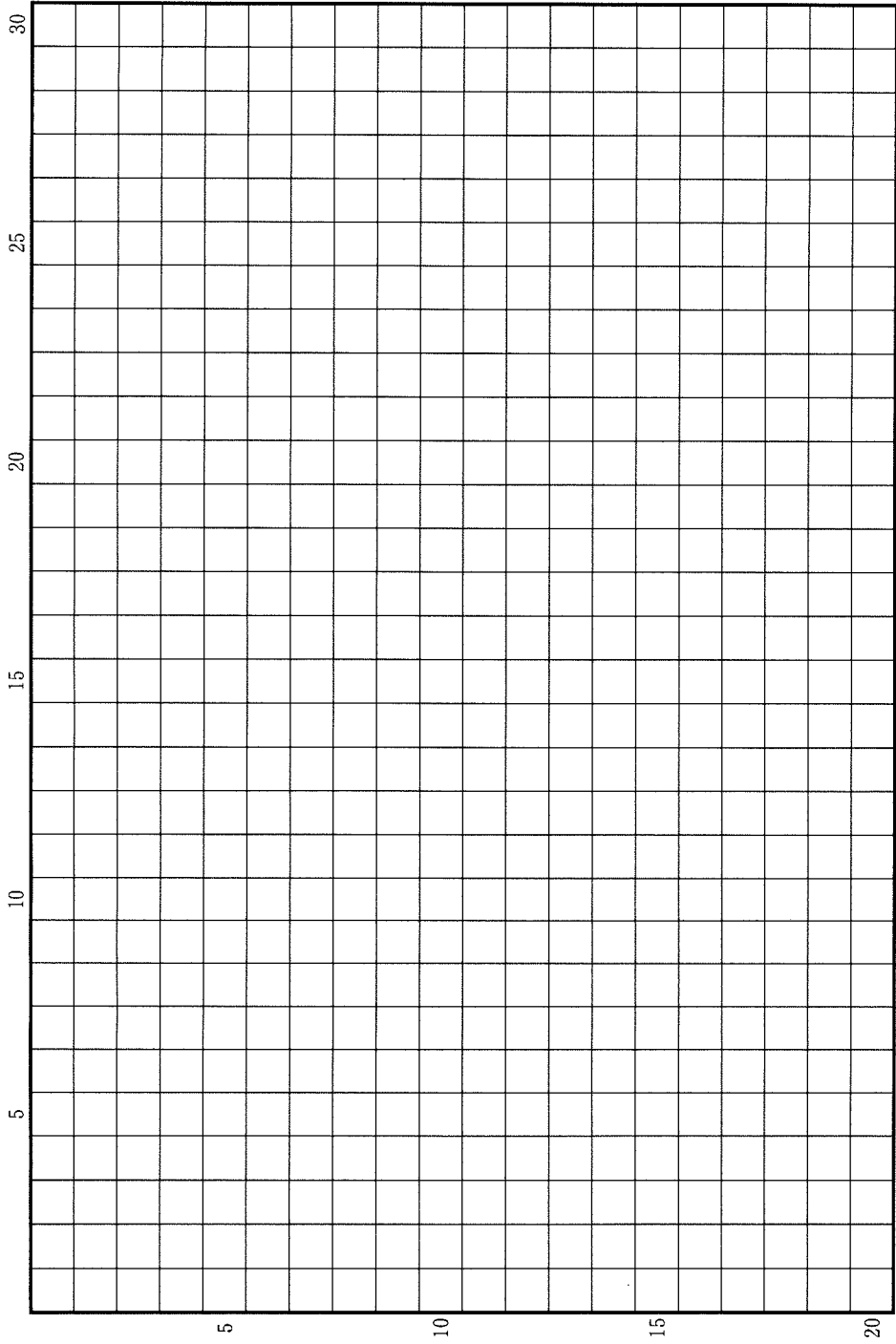
次の(1)~(4)の文章を読んで、下記の設問 A・B に答えなさい。解答は、解答用紙(ハ)の欄に、設問ごとに改行し、設問の記号を付して記入しなさい。

- (1) 17 世紀を通じて、日本の最大の輸入品は中国産の生糸であった。ほかに、東南アジア産の砂糖や、朝鮮人参^{にんじん}などの薬種も多く輸入された。それらの対価として、初めは銀が、やがて金や銅が支払われた。
- (2) 江戸幕府は 1685 年に、長崎における生糸などの輸入額を制限した。1712 年には京都の織屋に日本産の生糸も使用するよう命じ、翌年には諸国に養蚕や製糸を奨励する触れを出した。
- (3) 1720 年には、対馬藩に朝鮮人参を取り寄せるよう命じ、栽培を試みた。その後、試作に成功すると、1738 年には「江戸の御用達町人^{ごようたし}に人参の種を販売させるので、誰でも希望する者は買うように」という触れを出した。
- (4) 1727 年に幕府は、薩摩藩士を呼び出し、その教えに従って、サトウキビの栽培を試みた。その後も引き続き、製糖の方法を調査・研究した。

設 問

- A 江戸幕府が(2)~(4)のような政策をとった背景や意図として、貿易との関連では、どのようなことが考えられるか。2 行以内で述べなさい。
- B そうした政策をとった背景として、国内の消費生活において、どのような動きがあったと考えられるか。それぞれの産物の用途に留意して、3 行以内で述べなさい。

草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)



第 4 問

20 世紀初頭の日本の機械工業は、力織機や小型のポンプなど繊維産業や鉱山業で用いられる比較的簡易な機械を生産して、これらの産業の拡大を支えていた。また、造船業は国の奨励政策もあって比較的発展していたが、紡績機械をはじめ大型の機械は輸入されることが多かった。一方、高度経済成長期には、輸出品や耐久消費財の生産も活発で、機械工業の発展が著しかった。

次の(1)・(2)の文章は、この二つの時期には含まれた期間の機械工業について記したものである。これらを読み、機械類の需要や貿易の状況に留意しながら、下記の設問 A・B に答えなさい。解答は、解答用紙(二)の欄に、設問ごとに改行し、設問の記号を付して記入しなさい。

- (1) このたびのヨーロッパの大戦は我が国の工業界にかつてない好影響をもたらした。各種の機械工業はにわかに活況を呈した。特に兵器、船舶、その他の機械類の製作業はその発展が最も顕著で、非常な好況になった。

(農商務省工務局『主要工業概覧』1922 年による)

- (2) 近來特に伸びの著しい機種は、電源開発に関連した機械類や小型自動車及びスクーター、蛍光灯などの新しい機種である。輸出額では船舶(大型タンカー)が 40 % 近くを占めて機械輸出の主力をなし、繊維機械、ミシン、自転車、エンジン、カメラ、双眼鏡など比較的軽機械に類するものが好調である。

(通商産業省重工業局『機械器具工業の概況と施策』1953 年による)

設 問

A (1)に示された第一次世界大戦期の機械工業の活況はなぜ生じたのか。3 行以内で述べなさい。

B (2)はサンフランシスコ平和条約が発効した直後の状況を示す。この時期の機械工業の活況はどのような事情で生じたのか。3 行以内で述べなさい。

草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)

